

Title	『和漢兼作集』漢詩撰者考
Author(s)	仁木, 夏実
Citation	詞林. 2018, 64, p. 32-46
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70609
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

析

いくらか試みられているものの、

漢詩に焦点が当てられ

漢詩撰者考

た後嵯峨院治世から好文の亀山院、後宇多院時代の好尚を伝歌を並べて同時に賞翫する詩歌会や詩歌合がたびたび催され ちろん、一人が漢詩と和歌双方の作品を詠じることは全く珍 えすべて七言の二句一聯であり、そのように切り出された(あ しいことでは のから成立時活躍していた人物の作まで長期間にわ えるものと言えよう。 らかじめ二旬一 かし、 現存作品に乏しい鎌倉時代漢詩の資料として注 いずれにも才能を発揮した人物の作を部類別に収める。 る。「兼作」とは 和歌に関しては、 ないが、本集に収められる漢詩は、漢詩とは 聯のみが作られることもあった)漢詩句と和 は、 漢詩と和歌両方を詠じること。 鎌 収載作品は平安時代初期の 倉時代中期成立と見られる詩歌集 解題などで出典や作者の傾向 小野篁のも 意される。 たり、 漢詩と和 の分 13 で

代中期の漢詩を取り巻く環境の一端を明らかにすることであ い、未だ十分に解明されているとは言い難いその性格、 ることはこれまでほとんどなかった。 解明の足がかりとなることであり、そこからさらに鎌倉時 本 稿の目的 は 和漢兼作集』の漢詩撰者につい 、て検討 成立

る。

0

ころをまとめておく。 まず 和漢兼作集』について、これまでに知られて

える、 部と見られる下巻八丁分を持つ。 下の上巻十巻(ただし冬下部は一丁を残し後欠)に加え、 り見いだされた (以下冷泉家本)。 ているのみであったが、近年その親本が冷泉家時雨亭文庫よ伝本は長らく宮内庁書陵部蔵本(以下書陵部本)が知られ 秋部それぞれ上中下と、夏部 この他、 冷泉家本は書陵部本に見 諸本や古筆切れに ・冬部それぞれ上

めておく。 巻六・七・八、すなわち中納言・参議・非参議の作を残すの みの零本であるので、 漢兼作集』に収められていたことを注記するもの 残る。 (いわゆる『別本和漢兼作集』)が存在するが、これも残る。また、これらとは全く異なり、作者別に配列した 今回の考察では参考にする程度にとど が わ ず

を指すと考えられることから、 成立したものと考えられることと、「新院御製」が後宇多院 らは建治三年 知られるところは少ない。先行研究では、作者の官位表記か 前 れた可能性が指摘されている。 表 現存する伝本はいずれも奥書を欠いており、 紙裏の貼 紅紙に (一二七七)から弘安二年(一二七九) その後伏見院の時代に増補さ この指摘 の前半は冷泉家本の 成 登に 0) 関して 間に

亀 Ш 御 製 院御 製製

遺

同

比

と同 から、 とあること、すなわち亀山院の御製を「院御製」とすること もおおむね合致する。 じ頃に選ばれたものではないかと推定されていることと 弘安元年 (一二七八) に撰進された「続拾遺和歌集」

文庫 一蔵『歌書目録』には次のの他に本書の撰者につい には次のような記述がある。 て、 岡 山大学附属図 [書館: 池 田 家

> 漢兼作 卷

前 和 関白鷹司 殿仰二 日 ツ テ 在嗣 朝臣詩

ヲ集同 芫 俊朝

仰

和

歌ヲ撰ハシム

人の存在を想定しなければならない。 れる建治三年の前年に死去しており、 矛盾せず、 今和歌集』や、その編纂に深く関わったと見られる私撰集『万 妥当であろうし、本書に、真観が選者を務めた勅撰集 であろう本集の編纂に、漢詩担当者と和歌担当者がい れてきた。全体が残っていればおそらく二〇〇〇首を数えた より、菅原在嗣(一二三二~一三〇八)が漢詩を、葉室光俊 写と考え、「前関白鷹司殿 従来この記述については、「元俊朝臣」を「光俊朝 代和歌集』や『秋風和歌集』と数多くの共通歌があることと (真観)(一二〇三~一二七六)が和歌を選んだものと解釈さ 有力な情報と言えるが、真観は一応完成したとさ (鷹司兼平に比定される) 増補についてはまた別 臣 るのは の命に の誤

は本書に所収される漢詩の作者について整理してゆきたい。 か検討を行わなければならないが、その前提として、 いてはどうだろうか。

では漢詩の選者として名前を挙げられている菅原在嗣につ

本書の漢詩選者としてふさわ

しい人物

次節で

書の漢詩 句 は次のように記載され

る

である(ただし、藤原経範のように、 く変更されているということはなさそう ことが確認でき、現存する部分と今は失 較すると、入集数の約半数が残っている われている部分とで入集者の傾向が大き になる。 まず、全体の入集数注記と現 存数を比

集状況を類推することができる(ただし、 集数の上位者をまとめると下の ではない)。 全ての作者についてこの注記があるわけ が残る作者についてはある程度全体の入 数字は全体の入集数を漢詩数 のは全体の半分程度であるが、この数字 このことを踏まえて冷泉家本の漢詩入 で示してい 題と作者名の下に割注で書か る。 前述した通り現存する /和歌数の 表 1 n てい

不酔争辞 元 H 賜宴 温 春春門外雪埋 行 宮内卿三善清 七/二〉

【表 1】『和漢兼作集』漢詩入集数上位者

。和漢兼作集』漢詩入集数上位者のよう

入集数	作者	生没年	備考
11	菅原道真	845~903	〈二十五 十五〉
9	紀長谷雄	845~912	〈十五 三〉
7	大江以言	955~1010	
7	藤原良経	1169~1206	〈十二 十五〉「後京極摂政前太政大臣」
7	源師時	1077~1136	
6	藤原明衡	989~1066	〈十二 三〉藤原式家
6	源順	911~983	〈十三 九〉
6	藤原頼資	1182~1236	藤原北家資業流日野家。兼光男
6	藤原資実	1162~1223	藤原北家資業流日野家。兼光男
6	藤原親経	1151~1210	〈十 一〉藤原北家広業流。俊経男
6	藤原永範	1106~1180	藤原南家
6	藤原忠通	1097~1164	〈十三 十三〉「法性寺入道前関白太政大臣」
6	藤原義忠	? ~1041	〈十 二〉藤原式家
5	大江匡衡	952~1012	
5	輔仁親王	1073~1119	〈十 七〉
5	藤原敦基	1046~1106	藤原式家。明衡男。敦光兄
5	橘正道	?	〈十 一〉天元(978~983)の初年頃没
5	橘直幹	?	937年対策及第、966年曲水宴参加

b 江以 他と区別されている菅原道真が最も多く、 残らない者もい 記では七首も ことが言えるであろうか。成立と同時代であれば漢詩 ここから特色を見出すことは難しいように思われ こから特色を見出すことは難しいように思われる。いるが、平安時代を代表するような著名な漢詩人が多く、 ならば、成立と同時代の入集者に限ってみればどのような 言と続く。 の入集があるとされながら、 る)。 藤原良経や藤原頼資のような鎌倉時代 顔ぶれは 「聖廟御作」と作者表記され、 以下 現存部 -紀長谷 には一 撰者と の人物 首 大 \$

ある。 「二十八品幷九品詩歌」は、建長五年(一二五三)八月二 上品上生から下品下生までの九品を題として詠まれた詩歌で 上品上生から下品下生までの九品を題として詠まれた詩歌で の記述のので、「法華経」二十八品に「観無量義経」と「普賢経」、 上品上生から下品下生までの九品を題として詠まれた詩歌で と記述されたもので、「法華経」二十八品に「観無量義経」と「普賢経」、 と記述された詩歌で と記述された詩歌と に記述された詩歌と に記述された詩歌と に記述された詩歌と に記述された詩歌と に記述された詩歌と に記述された。 に記述された に記述さ に記述さ

がそれである

同

時代人ということになり、

撰者の立場がある程度類

推でき

作品がある。「二十八品幷九品詩歌」と「現存三十六人詩歌」るはずである。また、同時代であれば格好の比較対象となる

三月に詩人と歌人それぞれ三十六人の図とその詩 により、 色紙を屏風に貼ったもので、 同 . れらの漢詩作者と『和漢兼作集』 代の人物を比較すればどのようなことが言えるだろう 漢詩を藤原資宣、 現存三十六人詩歌」は、 歌を真観が撰んだとされ 時の鎌倉幕 建 0) 治二年(一二七 漢詩作者、 府執権北 これている。 歌を描 特に成立 いた 閨

は菅原氏に近い人物である可能性が高いと考えられ、「窓」 その扱いに明らかな差があることは否定しがたい。 侍読であった藤原俊国の入集がゼロであることと比較すれば、 流の資宣の入集数がわずかに一首、 例えば「現存三十六人詩歌」の漢詩編者である藤原北: ており、当時 人物のように考えられるが、どうであろうか。 た『歌書目録』に名前の挙がる菅原在嗣はまさにふさわし については、 これらを一覧すると『和漢兼作集』に漢詩 確かにこの時期の菅原氏は文章博士や式部大輔を輩 他に比べ、菅原氏出身者が多いことが見て取れ 0) 菅原氏儒者の活躍を物語るものとも言えるが 同広業流出 が入集する 次節では彼 身で亀山院 漢詩撰者 先に見 出 0)

Ξ

伝記を追って検証してみたい。

稿末の を参照していただきたいが、 読等を歴任した良頼 菅 原 在 【表3】 菅原氏略系図、 嗣は極官従二位、 (一一九四~一二七八) 文章博士、 貞永元年 (一二三二) 【表4】菅原在嗣・ 式部: 大輔、 の息。 後深草院侍 在匡年譜 に生まれ

【表 2】「和漢兼作集」「二十八品幷九品詩歌」「現存三十六人詩歌」入集当代儒者比較一覧

		和漢兼作集入集数 〈総入集数注記〉	二十八品幷九品詩歌	現存三十六人詩歌
菅原氏				
	菅原長茂(成)	4 〈六/二〉	0	0
	菅原在章	3	0	
	菅原在嗣	1		
	菅原在匡	4〈六/五〉		0
	菅原高能	3		
	菅原在兼	1		
	菅原資宗	1		
	菅原義高	3 〈六/一〉		
	菅原在範	1		
	菅原資高	1		
	菅原公良		0	
	菅原良頼		0	0
	菅原在宗			0
資業流				
	藤原光国	1	0	
	藤原資宣	1		0
	藤原資兼			0
広業流				
	藤原経光	2	0	
	藤原俊国		0	
	藤原兼頼			0
葉室家				
	藤原光俊	2〈五/十五〉		
	藤原定嗣	2		
	定円	2		
	藤原高定	1 (二/七)		0
	藤原光泰	1		
式家				
	藤原基長			0
南家				
	藤原経範	〈七/二〉	0	
	藤原茂範	〈六/一〉	0	0
	藤原範氏			0

建長二年 遺文五一七四五) 菅家長者としての活動も知られ 輔等を務め、 鳩嶺集』に 和漢兼作集』 (一二五〇) 「太上法皇」「院」のための願文からの に漢詩一 正二位大蔵卿に至った。 等)、当時の菅原氏を代表する儒者であっ の対策及第を経て、 聯と和歌二首を残す程度であるが、 (「北野天満宮注進案」(鎌倉 現存する作品は少なく、 文章博 摘 句六聯、 式 部· 大

たことは間違いない

まれ たことが記されている。深山路」九月一日条には、 のであるが、そのターニングポイントとなるのはいつだろうか。 を上回っている。それが最終的には在嗣が逆転することになる こにあたるが、二歳年下ながら、彼より三年早い宝治元年(一 た菅原在匡(一二三四~?)は彼の叔父在章の息で、彼のいと なって一気に加速しているのである。例えば同じく年譜に挙げ すなわち、若い日には遅々たる歩みであったのが、中年以降に 年譜を見るならば、それは在嗣が東宮熙仁親王 彼の経歴を一覧していて気が付かれることは、 に近侍するようになった弘安二年 九歳の頃ではないかと考えられる。 七)に対策及第し、 ながらその官位の進み具合に大きな波があることである。 その後の官位でもある時期までは彼 次のように在嗣の忠勤が賞せられ (一二七九) 頃、 飛鳥井雅有の「春の 名門の家に生 (後の伏見 彼が

その後、 廂 へ帰り参りたれば、 按察殿 東宮に仕える女

した可能性もあろう。

房か) 読) 在嗣朝臣と二人程、殊に不便に思し召さるる由、 対面 あ Ŋ. 人々多く奉公すれども、 御 師 とく (侍

仰せあり。

る。この後弘安十年(一二八七)には践祚した伏見院の侍読 連句や和歌を愛好した東宮から愛顧を蒙っていたことが分か 後伏見院、 翌正応元年(一二八八)には従三位に至り、 後二条院の侍読も務 め、 晩年まで改元

とほとんど変わらないので、 為祖父之子」という官位は現存する史料から確認しうる官位 別当文章博士正四位下弾正大弼式部大輔治 侍読も務め、 三十四歳の時に亀山院の侍読に任ぜられ、その息後宇多院の る。早熟の才人であったのだろうか。文永四年 の執筆を務めたことが葉室定嗣の日記 後嵯峨院の院文殿作文に列席、 見院の後、 いようである。 したことを伝える記事以降、 いる。その年には他にも近衛兼経邸での文事に参加し、 に関わるなど活躍した。 に補せられ、 それに対し、在匡は宝治元年(一二四七)十四 弘安二年 特に亀山院内裏での活躍が史料からうかがえる (一二七九) 八月二十八日に御書所作文に参加 ただ 『尊卑分脈』の「侍読亀山 彼に関する史料は残されていな この後数年で死去ある その数か月後に対策及第して 『葉黄記』 部 卿 荆 後宇多御書所 (一二六七)、 などに見え 一歳 部 卵費 の頃から は出家 10世守

山院、 たが、在嗣と在匡という二人の儒者について見るならば、地位を計る上で一つの目安となることはすでに別稿で指摘 よって人生の明暗を入れ替えたように見える。よって大きく進路の開けた感のある在嗣は、 在匡と、伏見院、後伏見院という持明院統の天皇への近侍に 東宮学士や侍読という東宮や天皇に近侍する役職が儒者 後宇多院という大覚寺統の天皇の許での活 皇統の交替に 躍が目立 0 亀 L 0

するということがあった。史料を検索すると、このことをめ祖父従二位行刑部卿淳高の養子となっている在匡の方を上と ぐっていくつかの興味深い証言を見出すことが出来る。 下であるが、前長門守正四位下公良の息子である公長よりも、 二七二)との間でどちらを上座とすべきか争い、 知られている。すなわち、 なお、 在匡の対策に際しては大きな相論が起こったことが 同じ菅原氏の公長(一二二四~一 結局年齢は

釈奠なり、

原漢文 秀才座次相論勘文の事、示し合はす所なり 藤原経光 の剋許、 刑部卿 「民経記」 寛元四年(一二四六)十二月十日 (菅原淳高) の亭に向 かひて閑談す。 条

この 相論について識者に勘文を提出させることとなり、 メンバーに含まれていたが、 記 事の一か月前 の十一月十日の陣定で在匡と公長 勘文を制作する前に在匡の祖 経光もそ 0 座次

> り、 詩作と歌合を行ったという記事(文永四年(一二六七)三月 たというのである。 父 (であり、この相論では養父) 民経記』には、 在匡に有利となるよう計画したのであろう。 後年経光の息子たちが在匡の許を尋 淳高と経光との間には個人的な交流があ の淳高と打合せを行ってい 7

七日条。や、や、 家族ぐるみのものであった。 もあり、 わせた在匡と顔を合わせたという記事 経光と淳高―在章― 在匡の父在章邸を尋ねた経光が、 在匡という菅原家三代の交流は (同年十二月八日条) たまたま居合

るに廟鑑に背かざるか。 座次相論の時、 を読み得ず、 尤も不便なり。 中 予定めて在匡道理の由を申す。今之を見 ・略)、講師は公長。公長多く人 其の才在匡に及ばず。

葉室定嗣 『葉黄記』宝治二年(一二四八)八月三日条

原漢文)

嗣が在匡を高く評価していたことがうかがわれる記事である。 公 (菅原道真) ない、前年の座次相論で自分は在匡を支持 無様な様子を見た記主定嗣は、 長は上手く人々の詩を読み上げることが出 釈奠は孔子を祀る大学寮の行事。 の御心に背かないものであろう、 やはり公長の才は在匡に及ば そこで講 一来なか したが、 師を務め と書く。 っった。 それは菅 た菅原公

々 ・の詩 在

匡という人物の像は、

それぞれは片々たるものであり、

史料の残存状

況も勘案し

ればならないが、これらの資料から浮かび上がってくる

文永から弘安にかけて、

亀山院・後

では勘文の読み上げと定文の執筆を行うなど事情を熟知する 立場にあった。 は言うまでもなく真観 (光俊) の弟である。 相論 0) 陣

定

九 裏には真観の息定円が在匡に送ったと見られる一聯が残る。 冷泉家本 『和漢兼作集』に新たに発見された下巻一二

讃州菅刺 史

利無名無世

有風有月有秋

心

内心の吐露であろう。 して秋を味わう感性のみが有る境地を夢想する詩句であり、 利害も名誉も れらを考え合わせるならば、 世間 の煩わしさも無く、 葉室家の人々も在匡をよく ただ自然の風や月、 そ

り、

知 詩の贈答をするような関係にあった。

るが、 嶺集』(永仁三年(一二九五)序)は、社僧良清の編纂による、漢詩句八聯、後嵯峨院のための願文等からの九聯が残る。『鳩 石清水八幡宮ゆかりの漢詩文を部類別に類聚する摘句集であ ていた文事にも積極的に参加していたことが分かる。 匡の作品は『和漢兼作集』の四聯のほか、 在匡は良清らとの連句を残すなど、 石清水八幡宮で行 『鳩嶺 集 に

> した儒者というものではないだろうか。「現存三十六人詩歌」 宇多院内裏を中心に様々な文事に関わり、 に当代を代表する詩人の一人として選ばれているのはそうし 多くの人々と交友

兀

た像を裏付ける評価であろう。

和 漢兼作集』 の話に戻ろう。

来考えられていた通り、本書成立の背景には後嵯峨院に始ま には、後嵯峨院、 |新院御製」 を後宇多院の詠と考えるならば、『和漢兼作集| 亀山院、 後宇多院が入集する。 おそらく従

当な人物は誰 か。

あろう。そうした傾向を背景に漢詩を収集、

亀山院、後宇多院と受け継がれた好文の傾向があるので

力な候補として挙げられるのではないだろうか。 られる真観の周辺とも親しい人物、と考えれば菅原 れていた人物、そして和歌の選定に大きな影響を与えたと見 にかけて内裏を中心とした文壇で活躍し、周囲からも評価さ 圧倒して多く入集している菅原氏の人物、文永から弘安年間 現存三十六人詩歌」入集当代儒者比較一覧を見て、 改めて36頁の【表2】『和漢兼作集』「二十八品幷九品詩歌 在 他家を 三世が有

れる 二年(一二七九)以降知られず、 しかし、すでに見た通り、 『和漢兼作集』 成立にどの程度関わっているかは不明で 彼の動向は後宇多院治 数段階を経ていると考えら の弘安

選定するのに適

はないか。 してその後の在嗣の躍進という鎌倉時代儒者の歴史の一結節 あろう。そうした場合、 ある程度まとめられたものを在嗣が増補したという可能性 することを完全に否定するものでもない。 点に『和漢兼作集』が存在していると言うことが出来るので また、この推定は 在匡の活躍と、おそらくは失速、 『歌書目録』が菅原在嗣 在匡の手によって による そ \$

 $\widehat{4}$

文壇全体の整理など、なすべきことは多いが、今後の課題と 考察を試みた。入集作品についてのより詳細な分析や当時 いう二人の儒者の動向から『和漢兼作集』漢詩撰者について 以上『歌書目録』の記述を起点に、菅原氏の在嗣と在 匡と 0

- (1) 以下本稿では、在位時、譲位以降に関わらず、天皇を「~院_ に統一して称することとする。
- (2) 安田徳子 「続拾遺和歌集成立の周辺―亀山院と藤原為氏 ている。 ○一二)はそのような詩歌が同時に詠まれることの多かった環境 詩歌』をめぐって―」(『鎌倉時代中後期和歌の研 (『後藤重郎先生傘寿記念和歌史論叢』和泉書院・二〇〇〇) が亀 .院内裏の特色として「詩歌両方を講じること」の多さを指摘し また、錺武彦「鎌倉中期の和漢兼作者―『現存三十六人 究』新典社・二

3

和田英松による謄写版

『和漢兼作集』

が一九二六年に発表さ

が和漢兼作者を生成し、尊重されることにつながったとする。

- 内庁書陵部・一九七二)に翻刻とそれぞれ解題が収められた。 書院・一九七二)に影印、 れ、その後大曾根章介・久保田淳編『御所本和漢兼作集』 『新編国歌大観』は図書寮叢刊の影印を底本とする。 図書寮叢刊『平安鎌倉未刊詩 葉』 (宮 ま 間
- れた。 城国文学』二六・二○一○)において、下巻の錯簡の整序が行わ が付される。その後、後藤「『和漢兼作集』 下巻の基礎的考察」(『成 和歌』(朝日新聞社・二〇〇五)に影印及び後藤昭雄による解題 『冷泉家時雨亭叢書四六 和漢朗詠集 和漢兼作集
- (5) 島津忠夫・日比野純三 国文資料・一九七六) 一編著 『別本和法 漢兼作集と研 (未 刊
- (6) 和田英松『本朝書籍考證』(明治書院・一九三六)。また、日 集」の作者表記及び成立年代について」(『名古屋大学国語国文学 十三日の間に限定できるとしている。日比野「御所本「和漢兼作 比野純三は官位表記から成立を建治三年の一月二十九日から九月
- 四〇・一九七七)参照

(7) 前掲注6和田著書

(8) 久保木秀夫「岡山大学附属図書館池田家文庫蔵 翻刻」(『(国文学研究資料館文研資料部)調査研究報告』二三・ 『歌書目録

11001)

- (9) 木戸裕子「『御所本和漢兼作集』の和歌(一)」(『鹿児島県立 集』と共通することも選歌志向の類似として指摘できよう。 ついても、現存する九首のうち、五首が真観撰による 短期大学紀要』四六・一九九五)参照。また、宗尊親王の和歌に 瓊 玉和 本の
- 現存の部分に見られる漢詩七聯のうち、 前掲注5で島津忠夫が「後京極摂政良経の場合、書陵部 聯が出典未詳のほかは

とは、 はなかろうということを思わせる」と述べていることが参考とな 詩句の採録に当って必ずしも特殊な資料を博捜したもので 『元久詩歌合』、五 一聯が 『三十六番相撲立詩歌』であるこ

- 11 十六人屛風詩歌』(福武書店・一九七五 『岡山大学国文学資料叢書三 二十八品幷九品詩 歌 現存三
- 解題は撰者にふさわしい人物として、藤原基家、 前掲注3の大曾根章介・久保田淳編『御所本和漢兼作集』 前掲注11及び注2錺武彦論考参昭 藤原光俊の子息

の

これに先立つ五月二十八日の記事にも東宮御所で探題の作詩に加 達に加え、「菅家の人々」を挙げる。 『日本古典全集 中世日記紀行集』(小学館・一九九四)。なお

(15) 拙稿「儒者の家における家説の伝授―広業流における天皇奉 授の歴史を中心に―」(『生活と文化の歴史学4 婚姻と教育』竹 わったことが記されている。

林舎・二〇一四) 匡父子は大覚寺統という区別があったようである。 読をそれぞれ務めており、良頼→在嗣父子は持明院統、 なお、在嗣の父良頼は後深草院、在匡の父在章は亀山院の侍 在章→在

16

月二十七日条、同年六月一日条、 『葉黄記』 寛元四年(一二四六)十一月十日条、 同年六月八日条など 宝治元年

应

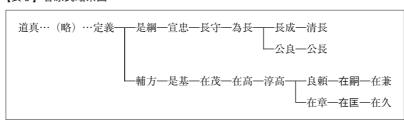
めの稽古であろう。 おそらく三月十日に亀山院内裏で行われた詩歌合に備えるた

島金治「鎌倉中期の京・鎌倉における漢籍受容者群 『鳩嶺集』のあいだ―」(『国立歴史民俗博物館研究報告』一七 拙稿「『鳩嶺集』 出典考」(『文藝論叢』六六・二〇〇六)、 [管見抄]

にき・なつみ 門学校准教授

明石工業高等専

【表3】 菅原氏略系図



【表4】 菅原在嗣・在匡年譜

	在嗣 年齢	在嗣事績(出典)	在匡 年齢	在匡事績(出典)
貞永 1 (1232)	1	誕生(『公』)		
文暦 1 (1234)			1	誕生(『葉』寛元 4年11月10日条記述 より換算)
仁治 3 (1242)			9	4/13 「史記」夏本紀を受ける(同中 華民国国立中央図書館蔵本)
				12/ 給穀倉院学問料(『葉』宝治1年 4/27日条)
寛元2	13	1/23 能登大掾(『公』)	11	
(1244)		1/28 宗尊親王蔵人(『平』)]	1/28 宗尊親王侍者補任(『平』)
寛元 3 (1245)	14	12/17 東宮(後深草院)蔵人 (血脈類集記)	12	
寛元 4 (1246)	15	1/29 蔵人(『中原師光朝臣 記』)	13	
				11/10 菅原公長との間で座次相論 諸道の博士らが勘申する(『葉』『民』)
宝治1	16		14	3/20 院文殿作文参加(『葉』『百』)
(1247)				4/20 院文殿作文参加(『葉』『百』)
				6/1 公長との座次相論につき院 評定(『葉』)
				6/8 陣定により、公長の上臈と なることが決まる(『葉』)
				7/8 献策。問答博士は藤原経範 (『葉』)
		8/15 釈奠について奏上 (『弁内侍日記』)		8/15 近衛兼経邸作文「勝地月光明」。作文後の連句の執筆を務める (『葉』)
				9/13 近衛兼経邸において、白楽 天影を掲げた「史記」講書。その後作 文・歌会・連句に参加。連句の執筆 を務める(『葉』)
				12/12 従五位下(『経俊卿記』)
宝治 2 (1248)	17	12/25 宗尊親王御書始に参 加(『葉』)	15	12/25 宗尊親王御書始に参加 (『葉』)
				閏12/14 近衛兼経邸作文「雪深賢聖家」に参加(『葉』)

『和漢兼作集』漢詩撰者考(仁木)

建長1	18	1/ 文章得業生(『桂』)	16	
(1249)		12/20 課試(『公』)		
建長 2	19	1/ 対策(『桂』)	17	
(1250)		1/5 従五位下。蔵人(『公』)		
		1/23 筑後権守(『公』)		
建長 3 (1251)	20	1/22 遷民部少輔(『公』)	18	
建長 5 (1253)	二十八	【品幷九品詩歌勧進		
建長 6 (1254)	23		21	1/ 式部少輔(押小路文書兼国勘文)
建長 7 (1255)	24		22	1/22 兼出雲権守(押小路文書兼国 勘文)
建長 8 (1256)	25	1/21 従五位上(『公』)		
正元 1	26	10/2 宸筆御書を大原山陵	24	
(1259)		に奉献次官(『後愚昧記』)		12/20 式部少輔辞退(『民』)
				12/25 亀山院御即位叙位。従四位
				下(『民』)
文応 1 (1260)	29	8/28 遷式部権少輔(『公』)	27	
弘長 2 (1261)	30	3/1 正五位下(『公』)	28	
弘長3	31	1/28 転式部少輔(『公』)	29	
(1262)		12/21 去式部少輔(『公』)		
文永 1 (1264)	33		31	1/21 治部卿補任(「妙槐記除目部類」)
文永 2 (1265)	34	1/5 従四位下(『公』)	32	
文永 3 (1266)	35		33	11/2 近衛基平と詩の贈答(『深』)
文永 4 (1267)	36		34	1/21 亀山天皇侍読・讃岐守(「新 抄」)
				3/7 藤原経光の息子(兼頼、兼仲 カ)、在匡宅にて講詩・歌合(『民』)
				3/10 亀山天皇禁裏にて詩歌合。 「春日山望」「秋夜旅情」「禁裏佳趣」の 題を選申する(『民』)

				4/25 御書所作文参加(『吉続』) 5/12 宮中での百日詩御会満足。 「詩境春秋富」参加(『吉続』) 11/7 藤原淳範献策の問頭博士を 務める(『民』) 12/8 父在章邸にて藤原経光と会 う(『民』)
文永 5 (1268)	37		35	2/19 三万六千神祭祭文を草する (『深』) 6/25 亀山天皇第一皇子の名字撰 申に際し、在章の撰申した「景仁」を 吉例とす(『吉続』) 8/15 宮中詩歌御会、参加(『吉続』) 9/16 近衛基平の関白第二度辞表
文永 7 (1270)	39		37	を草する「草表有隠士句事」(『民』) 9/23 御前にて閏月があった場合 の九月尽御会について質問を受ける (『吉続』) 9/30 宮中九月尽詩歌御会、参加 (『吉続』)
文永 8 (1271)	40	1/5 従四位上(『公』)	38	1/9 宮中詩歌御会始に参加。講師の一人を勤める(『吉続』) 1/21 宮中作文「雨露叶春情」。所労により詩を献じるのみ。なお、「文人不及広」の天気により、藤原基長は参加を希望するも勅喚されず(『吉続』) 1/29 釈奠の題について質問を受ける(『吉続』) 2/1 除目。棟望の申文を草するも、禅門より書様に不備があることを指
文永11 (1274)	43		41	摘される。この時治部卿(『吉続』) 2/10 吉田経長、在匡が子息在久の昇殿を所望していることを宮中、院に奏上す(『吉続』) 3/11 後字多天皇侍読・従四位上行治部卿兼文章博士(「勘仲記文永十一年暦記」『砂巌』所収「菅儒侍読臣之年譜」)

『和漢兼作集』漢詩撰者考(仁木)

文永12 (1275)	44		42	4/25 改元に際し勘文を草す(『師 守記』)
建治2	閏3/	「現存三十六人詩歌」成立		
(1276)	45		43	7/22 御書所別当補任(『勘』)
建治3	46	2/14 文章博士(『公』)	44	
(1277)		去文章博士(『公』)		
弘安2	48		46	4/12 院作文、連句に参加(『吉続』)
(1279)		8/25 文章博士(『公』)		
				8/28 御書所作文「歓情歳月長」、 参加。時に刑部卿(『勘』)
弘安3	49	5/28 東宮(後の伏見院)御		
(1280)		所にて探題の作詩に加わる (『春の深山路』)		
		9/1 東宮への侍読として		
		の忠勤を評価される(『春の深 山路』)		
弘安 6	52	6/26 鷹司兼忠邸五十番詩		
(1283)		合に参加。その後の連句にて 息在兼が執筆を務める(『勘』)		
弘安7	53	3/20 24日の御書所作文の		
(1284)		出題及びその後の連句に参加 (『勘』)		
		3/22 菅原高長の北野社仁		
		王講に参加。題者を務める (『勘』)		
		8/2 釈奠奉行(『勘』)		
弘安 9 (1286)	55	4/5 藤原兼仲邸にて終日 「史記」談義(『勘』)		
弘安10 (1287)	56	8/13 鷹司基忠太政大臣辞 表を草する(『勘』)		
		11/6 伏見院侍読(『伏見院 御記』『菅』)		
		11/12 伏見院に「史記」を奉授(『伏見院御記』『続史愚抄』)		
正応 1	57			3/17 男在久死去(『尊』)
(1288)		3/8 従三位(『公』『勘』)		
正応 2	58	1/17 内裏詩会に参加。御		
(1289)		製講師を務める(『勘』)		
		1/29 鷹司兼忠邸の作文・		
		連句に参加。読師を務める		

		(『勘』)	
		10/18 大蔵卿(『公』)	
正応 4 (1291)	60	3/25 正三位兼越後権守 (『公』)	
永仁 1 (1293)	62	8/5 改元勘文を草する (『勘』)	
永仁 2 (1294)	63	4/13 従二位(『公』)	
永仁4	65	4/13 参議(『公』)	
(1296)		5/15 兼式部大輔(『公』)	
		10/24 辞参議(『公』)	
		12/30 去式部大輔叙正二位 (『公』)	
正安 1 (1299)	68	4/25 改元勘文を草す	
正安 2 (1300)	69	3/6 大蔵卿(『公』)	
正安3	70	3/18 止大蔵卿(『公』)	
(1301)		12/5 北野作文に参加(『吉 続』)	
		12/15 後二条院侍読(『菅』)	
乾元 1 (1302)	71	12/23 後深草院六十賀の寿 命経薬師仏供養の願文を草す る(『吉続』)	
乾元 2 (1303)	72	閏4/3 亀山上皇冥道祭願 文を草する(昭訓門院御産愚 記)	
		8/5 改元勘文を勘申する	
嘉元 4 (1306)	75	12/7 改元勘文を勘申する(『実躬卿記』)	
延慶 1 (1308)	77	4 /12 薨去(『公』『尊』)	
尊卑分脈		式部大輔筑後守民部少輔式部 権少輔正二位参議大蔵卿文章 生長者文章博士侍読伏見後伏 見後二条	传読亀山後宇多御書所別当文章博士 正四位下弾正大弼式部大輔治部卿刑 部卿讃岐守為祖父之子

『公』…『公卿補任』、『尊』…『尊卑分脈』、『葉』…『葉黄記』、『平』…『平戸記』、『民』…『民経記』、『百』…『百練抄』、『桂』…『桂林遺芳抄』、『深』…『深心院関白記』、『勘』…『勘仲記』、『菅』…『菅儒侍読年譜』、『吉続』…『吉続記』